

# 高 山 如 大 地

— 第132号 —

発行人

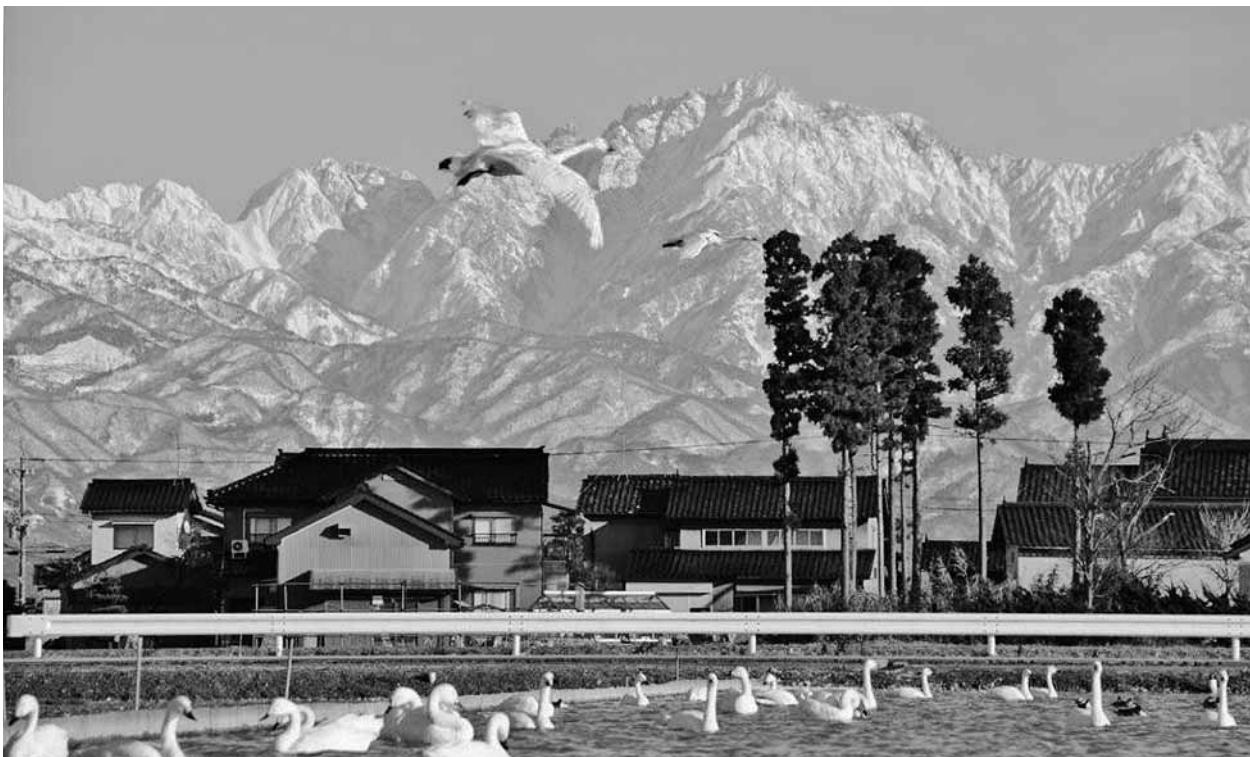
辻森 正顯

発行所

富山市総曲輪2丁目8-29 真宗大谷派富山教務所

編集

富山教区如大地編集委員会



富山市野中、『針原白鳥の里』から剣岳を望む

撮影者：生地 光

教員を退職して六ヶ月…。今までご門徒さんにはわがままを言って三十数年、二足のワラジを履きいろんな経験をさせてもらってきた。もちろん、家内や子供たちにも感謝している。

今夏には、昨年の津波で命を失った父の従兄弟を弔いに氣仙沼まで家内と共に行った。また先日、教員時代にお世話になったPTAの方の弔いに行つた。入棺の最中で、奥さんと子供たちが棺にすがって泣いていた。本人は届託のない、世話好きな方で、周囲には笑いが絶えなかつた。亡くなる二日前には、高校生相手に進路懇談会の世話をし、その後緊急入院・手術。一時は助かったと伝えられていたが、容態が急変して亡くなつた。

今まで、いろんな方の死に出会わせていただいたが、自分より若い人が亡くなると、いたたまれないものである。しかし高齢の方が亡くなれば、めでたいかというとそうでもない。それは、亡くなられた方一人一人の生きてこられた足跡に心を惹かれ、私の心に響く生き方をなされたのである。そのように考えると、念佛の教えに頷き、ともに救われていく世界を願わずにおれない私に気づかされる。亡き父が晩年「年齢の順でいうと、私が先に行つて、お前の席を温めておいてやるぞ」と言った言葉が思い起こされる。そこに今までの不安が吹っ飛び、何処でどう息を引き取ろうが、最後は「おまかせ」という答えに至る。

＊＊＊  
亡き人を偲びつつ  
＊＊＊

## 『如大地』の方向性を考える —編集委員会から発信できることを検討しています!—

如大地編集委員の任期は三年であり、今回の一二三二号から新委員でのスタートとなります。前委員では「葬儀」に関する事を中心講義録を載せてきましたが、新委員になつてからどうゆう方向性で記事にしていくべきかということを話し合つてきましたが、なかなか良い案も出ず困っていた所に柴田秀昭先生から「同朋会運動とは」という寄稿（本紙「特別寄稿」）がありました。

そこで委員で話し合いをもつたところ、同朋会運動とは聞いたことはあるけど一体どうゆうこと？ 目指していたものは？ 等々となり、過去の歴史を知るだけでなく、これから宗門に関わっていく私達にとっての歩む方向性を自分たちで真剣に考えるよい機会だという意見も出ました。ある先生に『本山は前回の七百回御遠忌で同朋会運動を始

めましたが、今回の御遠忌は何も始めなかつたですね。私達どうすれば良いですか？』と質問したら『貴方は本山が何かをやってくれるのを待つていてるだけですか？ 誰かがやるのでなくあなた自身が何かを始めればいいじゃないですか？ 上からやれと言われるまで待つているつもりですか？ 思つたら行動するのです。』と言われました。

大きなものの中にいると、ついつい他に頼つて自分の考えを持つことを忘れていたように思います。今後の如大地では「同朋会運動」の学びをとおして、皆さんと「これから」を考えていくきっかけを発信できたらいいなと考えております。また色々なご意見もあるかと存じますが、如大地編集委員会にお寄せ頂ければ有り難く思います。よろしくお願い致します。

如大地編集委員会

### 特別寄稿

## 同朋会運動とは

第十一組 圓常寺住職 柴田秀昭氏

はじめに

今回、大谷派が教団をあげて活動し展開してきた「同朋会運動」について、私自身が直接に経験してきた事、及び先輩・諸先生からお聞きした事などを

はじめて  
含めて、私の知るかぎりの事について、あらためて考えて見たいと思います。  
しかし断つておきますが、私は昭和三十七年の同朋会運動の開始時から、この運動に関わった者ではありません。

する昭和四十二年に、蓬茨祖運先生が所長であつた教学研究所へ助手として入つた身であります。それから教師修練や中央の伝研・伝講、更には地方伝研等に業務として関わつた者です。思い起こせば当時、第一次五ヶ年計画が終了しようとしていた頃でしたが、すでに一部の人から同朋会運動の行き詰まりが囁かれていた、そんな時期からの関わりです。

第一次五ヶ年計画の後、新たな運動の展開を考えて、蓬茨祖運・久木幸夫（教育学、横浜国立大学教授）の両師

によつて真宗の教化方法に、教育学の方法を用いた「真宗カリキュラム」の作成という事が導入され、行き詰った感があつた同朋会運動に、新しい方向性を見出そと努力なされていました。ところが残念な事に昭和四十四年に教団紛争が惹起して、それまでに考えられていた新しいカリキュラム構想も頓挫してしまいました。

そして気がつけば同朋会運動は、開始されて以来すでに五十年が経ちました。半世紀にもなつた同朋会運動は、人の身体に喩えれば、あちらこちらで動脈硬化現象が生じている状態と云えましよう。それに加えて、この同朋会運動を提唱され、しかもこの運動に深く関わつて来られた諸師・諸先輩の多くの方々が、残念ながらすでにこの世にはおられません。私は亡くなられた先生方や諸先輩方を想い出すと、なんとも胸一杯になるものがあります。同朋会運動を実際に行いながら、そこでの貴重な体験によつて、この運動の何が課題であり、何が問題かを身をもつて知つておられた先輩諸氏が、あまりにも少なくなつたという事があり、實に残念でなりません。



私自身が脳梗塞で倒れる前でしたから、もう十年以上も昔になりますが、

確かに唯円の著した『歎異抄』は、親鸞聖人が亡くなられて約三十年後には書かねばならなくなつたという歴史的事情があります。何事も時間が経過すると本来の意図が解らなくなり、もの願いから遠のいてしまうようです。近年、大谷派の同朋会運動もまた当初の主旨や願われた在り方からすれば、それは同様に衰退の一途を辿り、今では教団の教化事業全般を、大谷派では同朋会運動と呼ぶかのごとく受け取っている人も少なくないよう思います。その意味からしても、今ここでもう一度、原点に立ち返って、現在の同朋会運動をじっくりと検討して見る事は大切なことだと考えます。

その折なぜ『如大地』に同朋会運動について書こうと思ったかと云えば、実は私自身、亡くなられた嶺藤亮宗務総長と、生前中は不思議にも深い御縁を結ばせてもらい、とても親しくさせて頂きました。今思えば嶺藤総長に対して誠に失礼な言い方でしたが、昭和の大谷派の教団紛争事件の経緯と、その真相及び問題点について、嶺藤総長

号の二回にわたって、「同朋会運動の歩みと今後の課題」と云う事で、自身が体験したことを含めて、少しばかり書かせて頂いたことがあります。その意味では、私の同朋会運動への想いや考えはすでに述べました。したがって今更書くほどの事もないと云えます。

その時は確かに『如大地』の編集係の方から、「何か書いてほしい」という御依頼があったと記憶しています。そこで長く京都の教学研究所にいた者として、その責任上、何とか「同朋会運動について」自分の知る範囲の事だけでも、整理しなければならないという思いからピントはずれな事を、稚拙な文章で思いつくままに書いた覚えがあります。

その折なぜ『如大地』に同朋会運動について書こうと思ったかと云えば、実は私自身、亡くなられた嶺藤亮宗務総長と、生前中は不思議にも深い御縁を結ばせてもらい、とても親しくさせて頂きました。今思えば嶺藤総長に対して誠に失礼な言い方でしたが、昭和の大谷派の教団紛争事件の経緯と、その真相及び問題点について、嶺藤総長

でなければ誰も解らない面も多くあって、紛争の一番の中心におられた総長に、事件の真相と要因をなんとか記録的に見て、右の考え方もありれば、左の考え方の人もいるわけです。それらとして書き残してほしいと、再三に亘ってお願ひをしていました。しかし残念ながら嶺藤総長は、癌という不治の病でお倒れになり、それが果たせないままこの世を去られました。

想い出されるのは、私自身の勝手な要求に対しても苦笑いをしながら、時には紛争の中につけて、教団の最高責任者としての苦しい胸の内を語って下さった事もありました。そんないろいろな会話の中でも、私にとって忘れられないのが時計の振り子の話です。今はデジタル時計の時代ですから、何の事かと思われる人もあるかもしませんが、昔の時計を思い出してください。

実は何事を為すにせよ、この揺るぎない一点を明確にしておく事は、とても大事なことなのでしょう。何をするにもその目的意識及び願いが明確であるかどうかであります。そうでないと何をしてもダメになつてしまふように思われます。私は嶺藤総長に対して言いたい放題、聞きたいことを何でも口にしてきた責任上、自分としても何か問題整理をする責任があるという思いで、『如大地』の原稿を書いた事を、今もよく覚えていました。

それは激動の最中にあって宗務総長として、いつでも冷静に事態を判断されれる姿勢に感服して、何故そのように

## 同朋運動と同朋会運動

同朋会運動に関しては、嶺藤総長との会話の中で、嶺藤さんの口から何回

か聞いた一つの話があります。大谷派が宗祖親鸞聖人の七百回御遠忌を終え、それを縁として翌昭和三十七年に新しく誕生した訓覇信雄内局が同朋会運動を始めようとします。しかしそのためにはどうしても「真宗同朋会条例」を公布しなければならなかつたわけです。当時は法主の諮問機関として「宗務顧問会」というのがあって、そこでの承認がないと条例公布ができない事になりました。当時の内局の想いとしては「宗務顧問会」で簡単に承認してもらおうだらうということで諮問したそうです。ところが思いがけなくも、最初はその条例案が通らなかつたと云うのです。その理由は、宗務顧問の一人であつた曾我量深先生が反対されたからでした。

曾我先生は訓覇内局が考へている同朋会運動は「閉鎖的だ」と反対されました。宗務顧問会の場での曾我先生の意見陳述の内容は、どんなことであつたのか、その場での具体的な発言内容は解りませんが、それは後に曾我先生が「宿善と宿縁」と題して講演されたものの中で、同朋会運動という名に対する批判をされています。それを見ると先生の宗務顧問会での反対意見の内容が想像できます。

ところが、残念な事に曾我先生は、その講演の中で差別言辞を使用されたということが後になつて判明して、この差別発言が問題となり、先生自身が「異なるを歎く」という自己批判文を書かれるまでに事態が進展しました。それは私が決して忘れる事の無い出来事でした。現在、その「宿善と宿縁」の講義の一部は、『部落問題学習資料集』に掲載されています。

### 曾我先生の運動への苦言

それを見ますと、曾我先生は「同朋会運動は閉鎖的だ」と云われ、教団がこのような運動をすることに反対されたのは、同朋会の「会」の一字のもつて閉鎖性であり、それを指摘されました。「同朋会運動で無くて同朋運動であるべきだ」という趣旨の意見です。「会」を作るという、そんなセクト的な運動であつてはならないと云う事でした。

最初、私には曾我先生が一体何を主張しようとしたのか、その意が能く呑み込めませんでした。しかし「宿善と宿縁」の講義録を読んで、曾我先生の云われたかった事がほんの少しだけですが理解できたような気がしました。

「今更、同朋会などと云わなくとも、私は曾我先生の「宿善と宿縁」の講義録を読んで、直ちに連想したのは外でもない清沢満之師の『教界時言』第十一号社説の言葉でした。

大谷派なるものはそもそも何の処に存するか。曰く大谷派なる宗門は、大谷派なる宗教的精神の存する所にあり。……しかして、大谷派なる宗門の盛衰は、實にこの精神の消長に外ならず。……略

ています。」というのが、先生の思いではなかつたかと云われた方があります。

具体的には後に挙げましたが、「教化基本条例」の中に、「真宗同朋会」とあるのが許せなかつたようです。嶺藤さんから何度か聞いたところでは、宗務当局として反対される曾我先生に対して「これは同朋の会をつくる運動です」と一生懸命に説明したというのです。その結論は何か妙な話にも聞こえますが、先生は「同朋会運動はダメだが、同朋の会をつくる運動ならいい」と云う事で、結果的に先生には何とか原案で承認して頂いたのだというような事でした。それで嶺藤さんは、いつも「大谷派が行つてゐるのは、同朋会運動でなくて同朋の会運動である」という趣旨のお話を、いろんな所でよくされていたことを思い出します。

私は曾我先生の「宿善と宿縁」の講義録を読んで、直ちに連想したのは外でもない清沢満之師の『教界時言』第十一号社説の言葉でした。

大谷派なるものはそもそも何の処に存するか。曰く大谷派なる宗門は、大谷派なる宗教的精神の存する所にあり。……しかして、大谷派なる宗門の盛衰は、實にこの精神の消長に外ならず。……略

ここに見られる「大谷派なる宗教的精神」と云う言葉は有名です。ここに何故この世に大谷派教団が存するのか。要するに教団のある意義が明言されています。そしてまた別の所では、

況んや大谷派本願寺は、余輩の拠つて以て自己の安心を求め、拠つて以て同胞の安心を求め、拠つて以て世界人類の安心を求める所の源泉なるに於いてをや

と云われているように、自分は勿論の事、世界人類に「安心」を明確にする場としての本願寺教団であってほしいという願いがあつたのでしよう。きっと曾我先生の中に清沢先生の「大谷派なる宗教的精神」が脈々と伝統していたのだと思います。

事実、曾我先生が懸念されていた通り、後の歴史を見ると大谷派の同朋会運動を真似て他の既成教団でも、例えばお西で「門信徒会運動」、浄土宗では「お手つぎ運動」、天台宗で「一隅を照らす運動」と称して、それぞれの宗派の教化活動が展開されます。しかしそらの運動は概して曾我先生が心

配されたように、見事に「寺を強くする運動」「教団を強くする運動」として捉えられていくわけです。またそれは大谷派でもおそらく末寺の住職においては、同朋会運動とは教団を強くし、寺を強くする運動であると受け取った人も多かったのではないかと想像されます。

その証拠に同朋会運動が提起された時、当富山教区では本山及び別院に連なるところのさまざまな講の組織が各在所に残っていました。それらは本山から下附された『御消息』を中心にした伝統行事として、それなりに活動していました。ですから「御講」の組織がしっかりとしていった地域では、

同朋会運動に対し反対の声が強かつたと聞いています。つまり講の組織があるのに、教団の中央機関から同朋会運動という新しい教化体制・信仰運動が提起され、この運動に末寺が協力するよう必要としていたわけですから、

半世紀が過ぎたわけですが、私の思うところにおいても、私の周囲の人たちを見ても、残念な事にいまだ

「同朋会の本旨」が不明瞭なままの状態に思えます。近年の同朋会運動の実情はどうでしょうか。昭和の教団紛争を潜って、新宗憲が制定され、今後の

在り方として教団は同朋会運動を通して「同朋社会の顕現」に努めることができます。しかし単に一寺、一宗

### 同朋会の本旨

ところで『同朋手帳』を開きますと、最初のページに

真宗同朋会とは、純粹なる信仰運動である。……しかし単に一寺、一宗の繁栄のためのものでは決してない。それは「人類に捧げる教団」である。世界中のあらゆる人間の眞の幸福を開かんとする運動である

の声を押し切ってまで、なぜ同朋会運動が進められねばならなかったのか。その理由は当時の先輩方からいろいろな声として聞きました。それは創価学会に代表される新興宗教対策であったとか、相続講に代わる新しい募財体制の確立が目的であったとか、いろいろな事を聞きましたが、中でも私には最も印象的な言葉であったのが「時代が要求してきた運動であった」という事でした。

「同朋会運動」は、何のために行うものか。その願いは何か。 「同朋会運動」とは、その目的のために、教区や組がどうすることか。 そういう事をもう一度、じっくりと教区内の人々で能く考え、能く討議して、現時点できちんとした総括点検をすることが必要だと思います。

同朋会運動は単に教団の教化活動を表わす言葉ではありません。そこで今だからこそ、

しかしそんな教団状況の中での反対する人々も多かったのでしょうか。 または本当に同朋会運動を体験したこ

掲げられています。

私はこれを初めて読んだとき、何故こういうことを最初に断らねばならないのか、その真意のほどが正直に申してよく解りませんでした。しかしこれも、きっと曾我先生の宗務顧問会での発言が、その背景となっているのだろうと想像します。また戦後の思想的状況からして、運動という言葉を使えば、一種の政治的活動と見なされるということもあったのでしょう。従って「純粹なる信仰運動である」というスローガンは、今日において考える以上に重い意味を持っていましたと云えます。

また同じく『同朋手帳』には「教化

基本条例」の抜粋や「真宗同朋会条例」も掲載されています。まずは「真宗同朋会条例」の第二条に、「同朋会の本旨」が述べられています。

同朋会は、教化基本条例第九条（本派は、立教開宗の精神により、自信教人信の実を挙げ同朋社会の実現を期するため、真宗同朋会を設ける）の規定に則り、会員が自らの上に教法を聞き開き、その自覚を生活に生かし、もって健全な社会の形成に寄

与することをその本旨とする。

とあります。

また第五条には、「同朋会」という語とは別に「同朋の会」が謳われ、

同朋の会は、同朋会の本旨に基づき、会員が相共に研鑽し、同朋教団の一員としての自覚を深めることを目的とする。

同朋の会は、寺院又は教会によるほか、地域又は職域により結成することができる。……

とあります。

これをよく見ますと、同朋会と同朋の会との語が使い分けられているようにも受け取れます。今日、一体どれだけの人が、ここで意味を正しく理解できているのでしょうか。むしろこんな違ひのある事を知らないでいた人の方が多いのではないかと思います。

また推進員というのは、真宗同朋会条例施行条規では、

同朋会の趣旨の徹底と、その推進に当たる

ということが、主たる任務であると謳われています。それだけにどんな事よりも同朋の会の基盤である「同朋会の趣旨」とは、一体どういうことか。このことが何よりも明確にされねばなりません。

### 運動で訴えられた事とは何か

これについては、先に「教化基本条例」及び「真宗同朋会条例」のところで謳われていることを見ました。しかしもつと具体的には、一体どういうことを願いとする運動なのか。同朋会運動とは、何のために行ってきたかということであります。この運動を信仰運動として提起され、そして具体的に同朋会運動を開始された訓霸信雄師の弁をかりれば、

一般的な近代化という事で云えども、我が國は明治以来、西欧の文明を積極的に取り入れ、近代化と称される國づくりに邁進してきたとされます。ところが真宗教団は、旧態依然として近世の封建体制を存続させている感があります。それは教団の制度機構上の話だけではなく、その教学に於いても同様でありました。したがって当初の同朋会運

為し得ていない。まずは急ぎ近代化しなければならない。しかも近代化しただけではすまない。近代化したら直ちに近代を超えないべし。

私はこの運動を提起された訓霸師の弁を聞いて、ここで訓霸師が「近代」という言葉を何度も使って何を語ろうとされているのか、その中身が問われるかと思います。なぜなら教団が同朋会運動を展開する中で、「近代」という言葉こそ同じであっても、その近代ということの認識に世代間に於いても、その受けとめ方に違いがあると考えるからです。このことに関しては後に少しばかり私見も述べたいと思っています。

大谷派の教団はまだ組織から見ても、教学の面から見ても封建的である。世の中は明治以来、近代化が進み、そしていまやその近代そのものまでが行き詰っている状況になっている。ところが現教団はその近代化さえも

動は、教団の組織制度の改革と、また何よりも教学の近代化と云う問題がありました。

更にまた思想的に見て現代の行き詰まりを超えて、純粹に現代の人間の問題を明らかにする場としての教団へと蘇えらせたいという事、すなわち願生淨土という立脚地において成り立つ真の僧伽（念佛の共同体・同朋社会の顕現）を現実のものにしたいという、そんな大いなる願いのもとに始まつた昭和の宗教改革運動であつたと云えます。

た者ほど、宗教と聞けば非科学的なものとして否定的に捉えています。ですから現代を「無宗教時代」と表現する方もあります。無宗教とは「宗教を必要としない」という意味と、現在では「宗教と呼ぶに値する宗教がない」との二つの意味がありそうです。

宗教という語は、もとは英語の religion（レリージョン）の翻訳語です。したがつて宗教と云えば、西欧の神観念が混入した理解の仕方になりますが、仏教において「宗」という語は、とても重要な意味を持つ言葉であります。仏教的に云えば、宗教とは「宗の教」の意であり、宗は解字として「やね十祭壇」で、祭壇を設けた「みたまや」をあらわしています。

ところが大谷派が同朋会運動を提唱した頃とは違い、運動開始以来、半世紀経つた近年において考へねばならないことは、今日では「宗教」ということが随分と誤解され、よく解らないものになつてしまつたようだということです。

「私は宗教なんて持つていないし、信じない。祈るなんて弱い人間のすることだ」と思つてゐる人が急増している時代です。これは戦後教育の所為でしょうか。とにかく高度な教育を受け

れた訓覇師の言葉では、

宗教とは何かということは、裏から見れば宗教というものが我々にとつて何のためにあるのか、我々になぜ必要かということである。宗教がなぜ必要かということは、よく出される問い合わせである。その問い合わせのものがしかし、すでに問題をふくんでいる。

一方からいえば、その問い合わせを出した人にとっては、宗教はまだ必要になつてない。そういうことを、彼はその問い合わせによって告白しているのである。しかし同時に、他方からいえば、まさしくそういう人にこそ宗教は必要だという意味が、宗教にある。

（中略）要するに、その人は宗教を必要としていない、だからこそ、その人は宗教を必要とする、という矛盾した関係が、宗教の我々に対する関係である。そういうことは外の如何なる事柄についてもいえない。

（『西谷啓治著作集』第十卷三頁）

まさにその意味を問いかけるものとして、「大谷派は近代を潜つていない」と指摘された哲学者西谷改治師は、その著『宗教とは何か』の冒頭で、次のように云われています。

### 宗門白書

実は同朋会運動の原点となつたと思われるのが、宗祖七百回御遠忌の五年前に出された、宮谷法含内局の『宗門白書』（昭和三十一年四月三日付で「宗門各位に告ぐ」と題して出された）の提言でなかつたかと思います。その中にすでにして大谷派教団が同朋会運動を目指そうとしている事が明らかになっています。

『宗門白書』は、その全体が、「一、宗門の実情」・「二、教学について」・

「三、財政について」・「四、御遠忌について」・「五、内局の決意」の五項目からなるものであります。その中でも特に「宗門の実情」「教学について」の二つの項目で指摘されている事柄が重要な意味を持っています。

### 宗門の実情

実は五十年前に指摘する教団の現状分析と、現在の教団の状況が少しも変わっていない事に気付かされます。そこには、

一、御遠忌を前にして、我々は一体何をなすべきかの一途が明らかでない。

二、このような宗門の混迷は、どこに原因するか。宗門が仏道を求める真剣さを失い、如来の教法を自己明確にする本務に、あまりにも怠慢であるからではないか。

三、今日の宗門は長い間の仏教的因習によって、その形態を保っているに過ぎない現状である。寺院には青年の参詣は少なく、その構は

四、政治的経済的な不安のうすまく實際社会に、決然として真宗の佛法を伝道する仏法者としての自信を喪失している。

五、寺院の経済は逼迫し、あやしげな新興宗教は、門徒の中に容赦なくその手をのばしてきている。われらは果たしてこの実情を、本当に憂慮し反省しているであろうか。

六、眞の仏法者を見つけ出すことに困難を覚える宗門になってきている。

七、宗門はいまや懺悔に基づく自己批判から再出発すべき関頭にきている。懺悔の基礎となるものは仏道を求めてやまぬ菩提心であり、この懺悔と求道の実践よりほかにない。

二、この内容のものであります。ここに指摘されている事は、今日の教団状況そのものであり、半世紀経った現在も少しも変わっていないことに驚かされます。

### 教学について

次に教学について、とても興味ある提言がなされています。

明治の我が宗門に、清沢満之先生がおられたことは、何のにもかえがたい幸せであった。先生の日本思想史上における偉大な業績もさることながら、大谷派が徳川封建教学の桎梏から脱皮し、真宗の教學を世界的視野において展開し得たことは、ひとえに先生捨身の熱意によるものであった。先生の薰陶を受けて幾多の人材が輩出し、大谷派の教學は、今日に至るまで、ゆるぎなき伝統の光を放っている。これは正しく宗門が誇るに足る日本佛教界の偉観である。

### 教団存立の意義

同朋会運動を開始した頃、門徒の皆さんの意見を聴くと「寺は伝道の寺にしてほしい」というのが結論だったと聞いています。このような声が出たのも、昔から門徒というのは、手次の寺院及びご本山の経済的援助をするもの、昔から門徒というのは、手次の寺という関係だけになっていたからでしょう。しかしそれは残念ながら今も少しも変わっていないと思われます。それだけに今一度「寺は聞法の道場でなければならぬ」という同朋会運動の原点確認がもっと必要なかも知れません。

教学活動は集注されるべきものである。……

ある文が「白書」として公開されたわけです。この「宗門白書」はその後の大谷派の教學及び同朋会運動に大きな影響を与えたことは、衆目の一致するところでありましょう。ここで問題意識を承けて、今日的に一体どんな事が問題なのか。これに就いてもよくひとりに先生捨身の熱意によるもの事が問題なのか。これに就いてもよく討議する事が大切だと思います。

真宗の教學を、世界人類の教法として宣布することは刻下の急務である。その為には煩瑣な觀念的學問となつて閉息している真宗教學を、純粹に宗祖の御心に還し、簡明にして生命に満ちた、本願念佛の教法を再現しなければならない。(中略) 教學振興は宗門行政の看板に掲げる空辞であってはならない。具体的的事実に基づいて、信の人の養成に一派の

『宗門白書』を読むと、同朋会運動を始めた真意は、現実の教団に妥協する事無く、教団と今の自分の生き方を懺悔する心と、どこまでも飽くことのない悲嘆の精神が、同朋会運動の生命であったことを忘れてはならないと思います。

ところが今やどうでしようか。先年來、話題になっている教区再編問題一つをとっても、このような再編が提起されるに至った要因は、今日のように同朋会運動が教区単位で展開される以前は、教化と云えば、古くはお東を開いた教如上人以来、別院が教団教化の体制の拠点と考えられ、古くから在った由緒のある別院に加えて、新しく全國に本願寺飛地としての別院が設置されるようになります。ところがそれらの別院が老朽化してきたので修理修復を抱えています。この難題を如何に乗りきるかの延長上で論じ始められたのが教区再編問題であるように思います。

教区教務所を中心とした同朋会運動を核とする教化体制と、各地の別院を中心とした古い教化体制とをきちんと整理して論ずることも無く、別院の修

復問題を念頭に置いて教区の再編を考えるのは、ここでも門徒とは経済的な支援者と捉え、いかに薄く広く寄付金を募るかが思ひ描かれているのでしょうか。決して生きた教団づくりを目的に、教区再編の問題が生じているとは思えません。そこには現在の教団・別院をいかに維持していくかという経済的なことだけがテーマであり、それが教区再編論を産んだと見るのは、私だけでしようか。

私の云いたい事は、老朽化した各地の別院をどうでも良いと云っているのではありません。実は昭和の教団紛争とは、新しい同朋会運動と古い別院を中心とした教化の在り方との確執といふことが遠因となつて起つた事件であつたからです。したがつて教区・組を中心として新しく考えてきた同朋会運動という教化体制と、旧態依然としてある別院を中心とした教化体制との整合性を検討することも無く、ただどうのようであれ、いろんな形で教化が出来たら良いとするのは、眞の教団論に対する一種の怠慢以外の何ものでも無いと思えるからです。

更に悲しい事に、今では昔と違つて門徒の中にも本山とか別院という感覚が薄らいでいます。もっと云えば末寺もまた自分の所さえ良ければいいという処に座つて、お互いが教団を背負うという氣概が急速に弱まってきているという現実問題があります。それは寺院で生活している寺族と云われる人々の中に於いても、寺院という存在意義並びに社会的責任が問題とならず、寺院が寺族の単なる生活根拠の場でしかなく、一方、門徒の方も我が家の手次寺という意識が薄らぎ、葬式・法事などの法務契約関係だけで、寺と自分との関係を考えるようになつてきました。故安田理深師が「眞宗の教団は、三百六十五日、報恩講の教団である」と言われたことが思い出されます。確かに先生の言われるようになつてきましたように思えます。こういう事も都市化が進んでいるところ程、より顕著になつてゐるのではないか。

確かにいまや世界中の国々でさえ経済至上主義の国家と成り、経済国家としてグローバルな世界を考え、金銭だけが社会のなかで価値を持つかのように思われている時代です。こういう時代状況だけに、我々の教団とて否応も否応に当たる集いが行われていたに違はず。

眞は教団としての原型は親鸞聖人在世時よりあつたのでしょう。きっと関東の教団でも親鸞聖人を中心に、法然忌に当たる集いが行われていたに違ひありません。ところがその集いは、親鸞聖人がお亡くなりになると、聖人の命日に集う親鸞忌として受け継がれた

門徒の中にも本山とか別院という感覚が薄らいでいます。もっと云えば末寺もまた自分の所さえ良ければいいという處に座つて、お互いが教団を背負ういう氣概が急速に弱ってきている

何のために在るのか。教団の存立意義をみんなでよく考えるべきなのでしょう。

## 教団の原点

教団とは何か。昔はよくこのテーマで議論したようにも思います。それは「念佛の僧伽である」として、教団が真剣に論議された事がありました。故

安田理深師が「眞宗の教団は、三百六十五日、報恩講の教団である」と言われたことが思い出されます。確かに先生の言われるようになつてきました。故

安田理深師が「眞宗の教団は、三百六十五日、報恩講の教団である」と言われたことが思い出されます。確かに先生の言われるようになつてきました。故

安田理深師が「眞宗の教団は、三百六十五日、報恩講の教団である」と言われたことが思い出されます。確かに先生の言われるようになつてきました。故

安田理深師が「眞宗の教団は、三百六十五日、報恩講の教団である」と言われたことが思い出されます。確かに先生の言われるようになつてきました。故

安田理深師が「眞宗の教団は、三百六十五日、報恩講の教団である」と言われたことが思い出されます。確かに先生の言われるようになつてきました。故

安田理深師が「眞宗の教団は、三百六十五日、報恩講の教団である」と言われたことが思い出されます。確かに先生の言われるようになつてきました。故

のだろうと想像されます。このことは後に覚如上人の『報恩講私記』が書かれるに至った経緯を検証すれば明らかです。当時、関東に横曽根門徒、鹿島門徒等の弟子たちを中心とした大きな集団が各地に点在していました。そしてそれぞれの集団では、バラバラのやり方で宗祖親鸞を偲ぶ集いを行っていました。それを見た覚如が報恩講の形式を定めたのだとされます。そもそもこうした事が真宗教団の原点でありましょう。

ところが、この原点から現実の教団の在り方を振り返る時、そこに気になります。これがいろいろと問われてきます。それが『宗門白書』等に見られるような「真宗の本来化」の求めという問題提起であったと思います。日々の念仏の在り方は自己自身の為の念仏ではなくて、死者の孝養のための念仏であり、先祖供養と呼ばれても仕方がない方法で、葬式と法事・月忌を中心に生きてきた真宗教団に対して、同朋会運動は「真宗の本来化」を目指してきたと言えます。

特に親鸞聖人の七百回御遠忌法要の折りに、御遠忌のテーマとして「宗祖

に帰る」ということが掲げられました。そこには何よりも宗祖の求められたものを求めようということがありました。ですから現実教団の在り方は勿論のこと、自分自身もつねに自己の在り方を問うていく、まさに「念念称名常懺悔」の精神に貫かれた運動が求められたのでありました。

当初この運動は、戦後の我国の社会思潮にも則り、「家の宗教から個の自覚へ」という有名な運動のスローガンを掲げます。江戸時代の寺請制度によって、因習的に我が家は真宗門徒だとする「家の宗教」の在り方を問い、自覚的な真宗門徒の立ち上がりを願ってのスローガンの設定であったのでしょうか。そこには真の門徒一人もあらずとして、門徒が持っている信仰心を、近代の課題である「個の自覚」という観点から問い合わせることを求めるものでありました。それはまた同時に、教団から云えば、近世（江戸期）の宗学と呼ばれてきた真宗理解を問い合わせし、近代教学を樹立することにもなったわけです。

変革に伴い、大谷大学が文部省所轄の

大学として再出発するに当たって、講演された内容が、『真宗序説』として出版されています。その中で先生は、これまで真宗学と言えば、単に「如來とは何か」と問うてでしたが、「如何」は一般的の学問となると、「如來は私にとつてどういう意味があるか」とい

うように尋ねていく学問としなければならないという趣旨のお話しをされています。これなども江戸期の真宗理解を克服して、一般の人でも真宗の教義が解るように、言葉の問題をはじめとして、更にその学び方においても、如來とは何か、淨土とは何かというように、法としての仏や淨土を中心とした学びから、今度は機である人間を中心とした学びへと転換しなければならぬといいう指摘でした。

西欧の近代化は、それまでの中世の神中心の世界観では、神の命令が絶対であり、人間が神に隸属させられてきました。それはまた同時に、教団から云えば、近世（江戸期）の宗学と呼ばれてきた真宗理解を問い合わせし、近代教学を樹立することにもなったわけです。

思い出すのは、金子大栄先生が学制改革に伴い、大谷大学が文部省所轄の

あるキリスト教の神学の上でも、たとえばブルトマンの非神話化の問題に代表されるように、聖書中の非科学的な話は削除して、人間に解る聖書の読み方を求めたり、また言葉的にも誰にでも解る表現に努力したりすることに専注したのも近代という課題でありました。こうした歐米のいわば実存思想を根幹とした学問の在り方は、同時に戦後の真宗の学びにも多大な影響を与えた事は申しますがありません。ことに教団外にあって仏教を学び、親鸞研究をする人々に於いては一層のこと、こうした面を色濃く見せるに至ったのであります。また真宗の教団内にあっても、実存的信への解明が近代教学として求められてきました。

そのような教学を背景とした同朋会運動は、殊に信心ということを徹底して自己の内面課題として究明しようとしています。それが「個の自覚」であり、より一層の人間中心の実存的な教学の樹立が求められたのでありました。したがって同朋会運動とは信仰運動である、自己の信心解明を目的とする運動であると強調されたと思います。

## 信の質が問われる

しかしそのような教学が、昭和の教団紛争に加え、靖国神社国営化問題と、もう一つは教団内の部落差別事件の発生という、外からの教団に対する二つの社会的責任問題が突きつけられたことによって、それまで教団がめざしてきた近代化を軸とした、信心中心の学びの持つ問題性と、加えて同朋会運動の指導的役割をされた先生方の相次ぐ差別発言が問題となり、それまでの大谷派の同朋会運動の根底に置かれていた信心の内質が問題視されるに至ったわけです。同朋会運動で説いてきた信心が、本当に正しいものと云えるのかどうか。そんな難題に遭遇したのでありました。

この問題は、当時の教団内の人々に、信心派・社会派と云うような妙な言葉を生みました。そこには運動の願いである「親鸞の精神に帰る」とされる、その親鸞の精神をどのように受け止めたら良いのか。どうあることが正しく宗祖の心に帰ると言い得ることか。様々な意見が噴出する中で、それまで真摯に親鸞の教えに自己の生き方を学ばんとしてきた人たちまでも、自信喪失させたのであります。

前に挙げた同朋会運動の提唱者、訓覇師の言葉にあつた「近代」とは、一体何をもって「近代」を語ろうとしていたかが問われるのだろうと思ひます。なぜなら同朋会運動が展開される中で、多くの人の口から、この「近代」という言葉を聞きました。普通は近代とは時代区分上に使われる共通語です。しかし教団人の中では、運動の目的が「近世から近代へ」という命題であつたから、何となくお互に解った事として共に受け止めていた「近代」と言われる課題が、近代とは一体何を言ひました。

当て、何を問題としているのか、その問題の認識上で世代間の見解の相違が生じたのであります。

すでに申し上げたように、それが明確なかたちで表面化したのが、靖国神社国家護持の問題及び被差別部落問題等による、宗教と政治問題、並びに信仰心と日々の生き方との関わり方の問題として、表面化したわけであります。

長い間、私が同朋会運動で聞いたのは、「自己」とは何か」と問うことが念佛者の根本命題であるということでした。それが「個の自覚」とされる教団の近代教学の命題でもあつたわけです。自己という人間の解明は、一つに善導・法然・親鸞と連なる信心・安心の伝統として、徹底した自己の罪悪性、宿業性への自覚として求められてきました。

大谷派にはそんな近代教学としての人間觀がありました。それこそが機の深まり方、生き方が課題化されてきました。そうした自己と社会の関係をどの

としてきた人たちまでも、自信喪失させたのであります。

前に挙げた同朋会運動の提唱者、訓覇師の言葉にあつた「近代」とは、一体何をもって「近代」を語ろうとしていたかが問われるのだろうと思ひます。なぜなら同朋会運動が展開される中で、多くの人の口から、この「近代」という言葉を聞きました。普通は近代とは時代区分上に使われる共通語です。しかし教団人の中では、運動の目的が「近世から近代へ」という命題であつたから、何となくお互に解った事として共に受け止めていた「近代」と言われる課題が、近代とは一体何を言ひました。

当て、何を問題としているのか、その問題の認識上で世代間の見解の相違が生じたのであります。

すでに申し上げたように、それが明確なかたちで表面化したのが、靖国神社国家護持の問題及び被差別部落問題等による、宗教と政治問題、並びに信仰心と日々の生き方との関わり方の問題として、表面化したわけであります。

長い間、私が同朋会運動で聞いたのは、「自己」とは何か」と問うことが念佛者の根本命題であるということでした。それが「個の自覚」とされる教団の近代教学の命題でもあつたわけです。自己という人間の解明は、一つに善導・法然・親鸞と連なる信心・安心の伝統として、徹底した自己の罪悪性、宿業性への自覚として求められてきました。

大谷派にはそんな近代教学としての人間觀がありました。それこそが機の深まり方、生き方が課題化されてきました。そうした自己と社会の関係をどの

## 真の念佛者とは

とくに西欧の近代化の中では、國家・社会と切り離すことのできない自己の間觀がありました。それこそが機の深まり方、生き方が課題化されてきました。そうした自己と社会の関係をどの



うとしません。また逆に社会的実践が大事だと考へてゐる人は、信心を強調する人を見て、それは観念論だと冷やかに嘲笑して、その人の意見を聞こうとはしないということがあります。このように互いに同じ教団に身を置きながら、お互がお互いの主張を無視し、聞こうとしないということは誠に悲しい事です。

「自己とは何か」と云つても、自己が自己自身を知るということは、一見容易に思えて、実はこれほど困難な問題はありません。人間は自己自身を知るために作られていません。『御一代記聞書』に、

遠きは近き道理、近きは遠き道理なり。灯台もと暗らし

という言葉があります。最も近くて遠いものが自分という者です。私たちは物を知るということはこれを対象的存続として知るのです。それだけに外的実在としてある社会や国家を問題とし、その改革・革命を叫ぶ者は多くいて、でも、真に自己自身を問題として、むしろその社会を作っている自己を問う

者は稀です。

私たち「自己とは何か」といくら対象的に考えられた自己であって、それが真なる自己とは言えません。眞實に無私なる自己など我々にはあります。ですから自己を離れて自己を見せん。ですから自己を離れて自己を見る智慧が求められます。それ故なおさらの事、思想・見解の異なる人との対話、すなわち他の人の意見をよく聴いて、自己の主觀に気づかされ、そんな自己が常に破られなくてはならないのです。

現実問題として、いつもの同じメンバーが集まり、問題を議論していると、いう事に成りがちです。今ほんとうに大事なことは、できるだけ多くのことを他から学びとり、これによって自己否定をしつつ、同朋会運動の先達たちが何を願つて、このような運動を始めたのか。その志願を顕わにしていくことが求められているのでしょう。そのためには世代間を超えて、この問題が議論できる場を一刻も早く設ける事が、同朋会運動そのものかもしません。

## 富山教区災害復興支援ネットワーク主催

### 『サマーキャンプinとやま』開催

期日 二〇一二年七月二十五日～二十九日 会場 富山県内 立山町、黒部市

七月二十五日～二十九日にわたり、「サマーキャンプinとやま」が開催されました。この企画は福島第一原発の事故により、高い放射線の影響を受け続いている福島県在住の子どもたちとその家族を対象として、ほんのわずかな期間ではありますが子どもたちの細胞の再生と、太陽の下で大きいに活動することを目的としたものです。

福島では海で泳ぐことは勿論、外に出て遊ぶことにながら、皆さんのが住んでおられる福島の話になると、

私は自身は福島からの皆さんの言葉の前には何も言葉にできないという思いを抱きました。そんな中、福島のお母さんたちからは、お別れの寂しさの中に地元に帰つて生きていくという決意のようなものを感じました。

日程終了後も、今回参加してくださったお母さんたちの一人と個人的にメールのやり取りをしていますが、再開さ



原発事故が招いた現状と、不安や怒りなどが交錯した複雑な心境を口にしておられました。市のプールが再開されたが不安で泳ぎに行けないこと、洗濯物を外に干せないこと、子どもを外で遊ばせられないために子どもの筋力の低下が著しくその後の成長にも不安があることなど、その話のいずれもが放射線の高い地域に生活している人々の生きた言葉であり、そうであるだけに聞く人の心に直接触れる響きを持っています。

日程の最後に、スタッフも含めた参考者の皆で感想を述べ合いましたが、

私は自身は福島からの皆さんの言葉の前には何も言葉にできないという思いを抱きました。そんな中、福島のお母さんたちからは、お別れの寂しさの中に地元に帰つて生きていくという決意のようなものを感じました。

日程終了後も、今回参加してくださったお母さんたちの一人と個人的にメールのやり取りをしていますが、再開さ

れた市のプールから放射性セシウムが検出されてブルが閉鎖されたことや、原発二十キロ圏内から避難してきた人々と地元の住民との補償に対する不平等感など、原発事故を元にしてさまざまな歪が生じていることを教えてくださいます。

原発事故を引き起こしたのは一体誰でしょうか。直接的には電力会社や国家と

接するものが責任追及の矢面に立っていますが、それだけでは不十分なよう

いと思います。十二組の同朋大会で木ノ下秀俊氏（東日本大震災現地復興支援センター主任補佐）は「私たちは子どもたちにごめんなさい」と言わなければならぬと仰っていました。私たち一人一人がこの事故をきっかけに、社会に対してもどのように責任を取っていくのか問わ

れているように思います。

第十二組 明源寺 辻 明浩

今こそ考え方 う ハンセン病

ハンセン病訴訟勝訴11周年記念シンポジウム

期日 二〇一二年九月七日 会場 富山大学



今年度の『ハンセン病問題ふるさとネットワーク富山シンポジウム』を富山大学黒田講堂で開催しました。この取り組みは、東西両本願寺、民医連、諸団体が十年間近く力を合わせて開催し続けてきました。

皆さんが静かにここにおられることがそのまま沢山の人を助けることになります。だから皆さんが病気と戦うてそれを超越してゆかることは、兵隊さんが戦場に働くのと変わぬ報国尽忠のつとめを果すことになるのであります。」  
部落解放同盟の糾弾から継続していく「宿業」という法語をめぐる問題が、大谷派教団に提起されています。慙愧

「年齢の入所者たちが厚生労働省前で座り込み、各療養所でハンガーストライキをするような危機的な状況になつてゐる。」と言わされました。

国家賠償請求訴訟の勝訴から時間を経て、世間のハンセン病問題への関心は薄れています。しかしこの問題は今もこれからも、私たちの責任を問う続けるのだとと思いました。



する者こそ人であるとして、救いの対象として扱われるべき「罪」「業」。苦しみからの解放を説くための法語であるのに、「犠牲のシステム」を推進するようこれをおきこととなつた。先人から続く重い歴史を再認識しました。

## 一〇一二年度『富山教区同朋會議』開催

富山教区・富山別院宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要にむけて

期日 二〇一二年九月十一日 会場 富山別院本堂



えることが大切であり、教区内各位が善し悪しの議論の中で自主的に出遇つていただきたいという意見もでた。休憩を挟み三班に分かれて班別座談会を行なつた。私達の班では、「今の若い坊主は説教も出来ない。本当にそれで良いと思つているのか。」と言う痛烈な意見も出され、私達にとつて耳の痛い座談であった。しかし、御門徒さん方に「家族の皆でお勤めをきちんとしていますか?」と質問したところ、参

別院宗祖御遠忌では、私達真宗門徒一人一人の進む道が問われるような機縁になればこんなに有り難いことは無いのかなと思つた。



喜んで悪しの講論の中で自主的に出遇つていただきたいという意見もでた。休憩を挟み三班に分かれて班別座談会を行なった。私達の班では、「今の若い坊主は説教も出来ない。本当にそれで良いと思つてゐるのか。」と言う痛烈な意見も出され、私達にとって耳の痛い座談であつた。しかし、御門徒さん方に「家族の皆でお勤めをきちんとされていますか?」と質問したところ、参

別院宗祖御遠忌では、私達真宗門徒一人一人の進む道が問われるような機縁になればこんなに有り難いことは無いのかなと思つた。

第十一組 岩隆寺 金山哲成

第十一組 岩隆寺 金山哲成



## 『北陸連区ソフトボール大会』優勝!!

期日 二〇一二年九月十四日 会場 金沢市

富山教区仏教青年準備会活動報告

九月十四日に金沢市の専光寺ソフトボール場を会場に、北陸連区ソフトボール大会が開催されました。この大会は、北陸連区内の仏教青年会、青少年委員会等で活躍する寺族、御門徒が集まり、親睦を深め、教区の枠を越えて連携していくことを目的として毎年開催されています。近年、連区外からの参加もあり、懐かしい再会、そして新たな出会いの場となっています。昨年には、この大会で出会った各教区の代表者でメーリングリストを作り、自教区の活動や他教区の活動に参加した感想など、情報を共有できるようになりました。各教区の活動の刺激となっています。今年は当番教区の金沢をはじめ、北陸連区から富山、高岡、能登、小松、大聖寺。連区外から高田、名古屋、京都の合計九教区の参加がありました。富山教区は仏青準備会として十六名で参加しました。この大会に向け、猛暑の中メンバーが集まり「今年こそ優勝を」と練習してきました。その成果もあり、第一試合から二連勝。リーグを一位で通過し、高田・名古屋合同チームとの優勝決定戦に臨みました。しかし、雨に見舞われ試合は中止。両チー

ム代表九人によるジャンケンで勝敗を決しました。その結果、富山教区は見事四年ぶりの優勝。念願を果たすことができました。

富山教区仏青準備会は、寺族、御門徒を合わせ現在五十名ほどの会員で、教区・別院の宗祖七百五十回御遠忌を御縁とし、仏教青年会立ち上げに向けて活動しています。教区内外で様々な活動を行っている会員が在籍しています。また、他教区との交流も積極的に行っています。たくさんの出会いの中で、共に語り合い、共に学び合う中で「自らの課題となるものを発見できる場」として仏教青年会を立ち上げていきました。そして共に教区・別院を盛り上げて活動を行っています。

今年は当番教区の金沢をはじめ、北陸連区から富山、高岡、能登、小松、大聖寺。連区外から高田、名古屋、京都の合計九教区の参加がありました。富山教区は仏青準備会として十六名で参加しました。この大会に向け、猛暑の中メンバーが集まり「今年こそ優勝を」と練習してきました。その成果もあり、第一試合から二連勝。リーグを一位で通過し、高田・名古屋合同チームとの優勝決定戦に臨みました。しかし、雨に見舞われ試合は中止。両チー

ム代表九人によるジャンケンで勝敗を決しました。その結果、富山教区は見事四年ぶりの優勝。念願を果たすことことができました。

富山教区仏青準備会は、寺族、御門徒、男女問わらず常時会員も募集中です。寺族、御門徒、男女問わらず常時会員非ご参加ください。

### 【連絡先】

富山教区仏青準備会  
代表 桃井量純（十組 聞成寺）  
TEL : 076-421-2786  
Mail : mo\_mo\_pl\_g@yahoo.co.jp  
第十組 聞成寺 桃井量純

## 『寺と門徒のつながりを考える』

期日 二〇一二年九月十九日～二十日 会場 上市町 ひのき恋月

門徒研修小委員会主催

### 組門徒会役職者研修



写真左から4番目が浦島弘義氏

平成二十年に門徒会から「門徒教化事業の活性化について」の提言があり、以来、標題のテーマで、度々話し合われてきたが、堂々めぐりに終始して今一つ踏み込んだ議論が無かったように感じる。今春には組門徒会員の改選もあり、二十七名中九名の方が初めて参加された。初日は活動を行っている会員が在籍しています。また、他教区との交流も積極的に行っています。たくさんの出会いの中で、共に語り合い、共に学び合う中で「自らの課題となるものを発見できる場」として仏教青年会を立ち上げていきました。そして共に教区・別院を盛り上げて活動を行っています。

今後、主な活動ですが、二〇一三年四月五日に富山教区災害復興支援ネットワークと共に、真宗本廟で行われる教如上人四百回忌「子どものつどい」－東日本大震災復興支援に参加します。詳細については現在検討中。スタッフも募集中です。寺族、御門徒、男女問わず常時会員を募集しています。興味のある方は是非ご参加ください。

提言の冒頭には、「高齢化が進行し、次世代の宗教心の欠如から聞法を中心とする人が減少している」と指摘されています。宗教心の欠如について、法義相続の危機、「いのち」のつながりの危機を感じた提言だとと思う。

こうした背景は、時代の変遷とともに制度や社会環境、価値観などが大きく変化してきてることが要因である。宗教心の欠如について、法義相続の危機、「いのち」のつながりの危機を感じた提言だとと思う。

と思ふ。行き過ぎた「個の尊重」、人ととの関わりを煩わしいとした結果の無縁社会、家族のつながり、地域のつながりも希薄になってきている今日、寺と門徒をつなぐ目的は何か。「つながる」とは、どんな状態になることを希っているのか。

まず、この事をはつきりさせないと、「ただ言っているだけ」のお題目になってしまい、具体的な動きにならないかないと思う。

私は縁あって推進員となり、同朋の皆さんと聞いているだけのところ。また内容的には話が深まらなかつたことです。二日目に十名の欠席があったこと。また内容的には話が深まらなかつたことです。二日目に十名の欠席があったこと。また内容的には話が深まらなかつたことです。

提言の冒頭には、「高齢化が進行し、次世代の宗教心の欠如から聞法を中心とする人が減少している」と指摘されています。宗教心の欠如について、法義相続の危機、「いのち」のつながりの危機を感じた提言だとと思う。

こうした背景は、時代の変遷とともに制度や社会環境、価値観などが大きく変化してきてすることが要因である。宗教心の欠如について、法義相続の危機、「いのち」のつながりの危機を感じた提言だとと思う。

僭越にも問題提起をさせてもらつたが、今後の議論のきっかけになれば幸いと思います。

第十一組門徒会員（善念寺門徒） 浦島弘義

## 富山別院報恩講

期日 二〇一二年十月六日～八日 会場 富山別院

十月六日から八日まで、信明院鍵役の全座御参修のもと富山別院報恩講が厳修されました。

教区合唱団「コール菩提樹」の合唱による音楽法要での初逮夜から始まり結願日中まで二昼夜にわたって、第九組第十組の正副当番組をはじめ、助音方、掛役、坊守会他、諸役の皆さまのご尽力によって滞りなく法要が勤まりました。



期間中は、延べ七十余名のご参勤、約四百名のご参詣をいたしましたこと、また、ご寺院及びご門徒の皆さまから報恩講御香儀を賜りましたことに對しまして、ここに衷心より御礼申し上げます。

信明院鍵役執刀の帰敬式では、九十九名の受式があり、真宗門徒としての自覺に立ち、日々聞法に励む旨の誓いを新たにされました。

法話は、各日共に日中・逮夜の後は玉光順正氏から「真宗という文化」を講題に、「現代において大切なことと

して、私たちは親鸞聖人の教えを聞く、そして同時に、自分の生き方として外に向かって表現することが求められているとのことからお話を始められ、現代においては、一人ひとりがあらゆる機会をとおしてヒントをいただき自分で考えることが大切であり、特に報恩講においては、自分が教えを聞いて、今何を考えているのか、何をしようとしているのかを報告することが宗祖から求められており、いま私が宗祖の教えを聞いて、こう生きるんだと表現することが大切である」と話されました。このお話を思い返すと、報恩講に携わっていても業務に追われてそれをこなすことには精一杯になってしまっていた私にとって、なにも表現できていないと誠に不甲斐なく申し訳ないと思います。

また、法要後の反省会において、事前準備不足の指摘や役割分担の徹底等の反省点をご指摘いただき、来年度の報恩講に向けて改めさせていただきました。

期間中ご尽力くださいました諸役の皆さま、ご参勤、ご参詣いただいた皆さんに重ねて御礼申し上げますとともに、二〇一四年にお勤まりになる教区・別院宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌に向けて、と共に歩んでまいりたいと思います。

富山別院会計 井上誠一

## 富山教区仏青準備会

初めての試み『須弥盛作り』開催！  
期日 二〇一二年十一月十一日～十三日 会場 第十組 聞成寺



十一月十一日に第十組聞成寺を会場に富山教区仏青準備会でもちつきをしました。以前から「須弥盛を作ろう」という計画があつたのですが、なかなか実現する機会がなかったことと、本当にできるだろうか?という思いから先送りにされきました。今回さまざまな御縁が重なり、「とりあえずやってみよう!」ということで実現することができました。それぞれの家庭にある道具を持ち寄り、たくさんの方に御指導いただきました。もちろん小松教区の某御寺院様より頂戴しました。今年初めての試みということで、慣れない作業にかなり苦戦しましたが、参加者十五名ほどで賑やかに楽しく開催できました。

このもちつきには二つの目的がありました。一つは教如上人四百回忌「子どもつどい」—東日本大震災復興支援ーに、「あんばやし」と「お餅」を使つたブースで参加を計画しているので、その練習のため。もう一つは「須

弥盛を眺めていました。まだ改善の余地あります。が、たくさんの方々が協力し、思いを込めて作つてくれた須弥盛は、手作り感たっぷりで本当に素敵でした。

本山の須弥盛を参考に作成されてお供えしたい」というものでした。

今年は聞成寺の報恩講にお供えしましたが、今後御縁を頂ければいろいろな場でお供えしていきたいと考えています。



富山教区仏青年会準備会代表 桃井量純

「教山教区の雅楽を考えよう」「雅楽をやつてみたい」「雅楽に興味がある」

## 富山教区内に雅楽の会（『興徳楽会』）が再興しました。

会場 富山別院

「富山教区 雅楽を始めませんか。」

この度、『教務所だより』にこのようないい案内を入れさせていただきました。

富山教区で雅楽？と思われた方もいらっしゃると思います。

今から五十年ほど前の大正七百回御遠忌の時には、教区内の寺院で多くの御遠忌法事が勤まり、出仕や退出の際に教区内の僧侶が雅楽の演奏をしていましたと聞いています。

今回、雅楽の会を作るに至ったのは「雅楽に興味がある。」

「雅楽の笛を吹いてみたい。」

という人たちの思いかから始まつたものです。雅楽

たもので、雅楽の演奏を耳にするのは、本山・別院においての報恩講、もしくは最近耳にするところでは東儀秀樹さんの演奏

する筆篥の音色でしようか。夕方六時のNHK『ニュース富山人』のテーマソングでも耳にしているところです。

雅楽は今から千二百年以上昔に日本



へ伝えられたと言われています。笙、篠篥、龍笛といった管楽器と太鼓等によって演奏される管絃、それと舞を伴う舞楽があります。

どれも雅やかな曲調が特徴だと思います。

これから、富山教区で雅楽を始めることがあります。笛の音を出すのもままならない素人集団なので、教区内で以前に雅楽をされていた先輩方に参加していただき御指導していただければと思っています。これから一年ぐらい『教務所だより』に案内を入れさせていただきますので興味のある方は是非参加してください。まずは、一つ一つの笛の音を出せるようになること。次に、合奏出来るようになることを目標にして練習して行きたいと思います。さらには、報恩講や御遠忌法要などで演奏出来たらいいなと思っています。



## 今回の紹介は、第十組 永宗寺 子ども会

子ども会を始めたきっかけは、子どもも集まる場をお寺に作りたいという願いからでした。

子ども会の開設は難しいと思っていましたが、教区の夏の児童研修大会などのお手伝いをしていたことや、お寺の子ども対象の企画の

「みんなあつまれ お寺に泊まろう」でやったことがとても役に立っています。

この子ども会も今年で五年目を迎えました。

毎月一回、土曜または日曜の午前中と年に一度お泊まり会をし

ていますが、大切なお寺のご法事として、できるかぎり

住職・坊守そろって参加しています。

子ども会のプログラムは、朝九時に始まり、勤行、ちかいのことば、お話、絵

本読み聞かせ、レクリエーションをして

十二時ごろに閉会します。遊びに来る子

どもたちは十人から三十人ほど、年数回

はプログラムの中に昼食を含めて、子どもたちと一緒に本堂でお昼を食べます。

子ども会を始めてすぐの二〇〇九年には、本山から「絵本一〇〇冊プレゼント」

の贈呈を受けました。たくさんの方々

に集まつたみんなで本山贈呈シールを貼っていきました。子どもたちが自分たちの子ども会の本が一度にたくさん増えたこととても喜んでいたことを思い出します。

子ども会の中学生通信」も始めました。また子ども会を始めた年から市立柳町保育所の園児を招待して「はなまつり」を行っています。他寺院から二mほどある白象をお借りし、園児に引っ張ってもらつて保育

所から本堂まで行進してきます。本堂で園児と一緒に、はなまつりの歌を歌い、お仏をし、お釈迦さまの紙芝居を見ます。

最後に門徒の方々に入れていただいた甘茶をみんなで飲んで閉会します。保育園の保護者の方々か



富山教区雅楽会『興徳楽会』  
連絡先 事務局 高山芳樹  
TEL (携帯) 090-2376-5235

第十組 永宗寺 永崎 晓

## 参議会議員・正副門徒会長に聞く

昨春に組及び教区門徒会員の改選と参議会の通常選挙がありました。当選については、一三一号に掲載いたしました。このたびは、ご依頼をして、寄稿いたしました。

## 初心に帰り同朋会運動の実践を



## 富山教区選出参議会議長

A black and white portrait of Saito Tadashi, a man with glasses, wearing a dark suit, white shirt, and patterned tie. He is smiling slightly and looking towards the camera. The portrait is set within a circular frame.

昨今の宗政において、特に教育教化、制度機構、財政など重要課題が山積みであり早急に解明し冷静に対処しなければなりません。

去る十一月八日、九日に『組門徒会長研究集会』が「組門徒会設置の願いを表明会運動と宗憲に学ぶ」というテーマで開催されました。趣旨は、組門徒会員は今改めて宗憲の同朋公議の精神に基づき、組の運営の一翼を担うという重要な役割が託されていることを再確認し、共有することです。

一、組を共同教化の場とする。  
二、組長と門徒会長が車の両輪となる。  
三、月に一度は組門徒会が情報交換する場をもつ。  
四、組、各寺のあり方を協議する場をもつ。

二〇一二年の反省から



富山教区選出参議会議員

佐近  
和夫

どっこい生きている！



富山教団門徒会会長

七十歳で現役を退くまで「自分の人生は、自分の才覚で努力して切り開くもの」を信条に生きてきました。

しかし、第一線を退くと、今までの人の間関係も微妙に変わる、従って周囲の状況も変わってくる、何より健康が意外と衰えていることに気づく、などあらゆるところで、ままならない人生が見えてきました。

第十組門徒会長（三年間）から教区門徒会長へ四年目になりますけれども未知のことばかり。頻繁に会合があり、それに理由があるから、国の議会を手本とした教団の仕組みは、極めて合理的で強固です。それゆえに定義とか規則にシビアな結果、「こころの持ち方に関わる組織なのだから、もっと簡略で柔軟に」との印象も受けなくもありません。

ただ、人は老いが深まるところに頼むものを求め始めることが、どうにもならない状況で自力の限界を知り、大きな力（弥陀）に生かされていることが何となく分かってきました。モミジにも夕日にも今までと違った思いで、思わず知らず念仏を唱えていました。

そんな昨今の思いから、聖人が悩み抜かれて示された世界はタダモノでなく、今の世に「どっこい生きている」頬もしさと重みを、あらためて感じています。

雜感



富山教区門徒会副会長

の重い年であり心を引き締めて対応したいと思います。今後とも更なるご協力を  
お願い申し上げまして終わりとさせて頂  
きます。

高齢者ばかりの会ですが、先ず、私たちのよしみを深めて、この会の持つ役割  
を理解し合い、次の世代につなげるよう  
に努力をしたいと念じています。

十四才で亡くなつた母まで六名の死を家で直視したことになる。特に自分が親の立場になってからの両親の死はショックが大きかった。

故人、一人一人には沢山の思い出やエピソードがあり、なかなか味わいがある。それぞれの私の年齢も関係があるだろうし、家族構成によつても感じ方が違うのだろう。そして「去る者は日々に疎し」とあるようについ忘れがちにもなる。

今、思い浮かぶのは、父が亡くなり託法寺住職よりお寺の手伝いを頼まれた時に母がとても嬉しそうにしていた顔。その母が認知症になり亡くなるまで見守り続けた時間、見送る事の大切さと大変さを実感できたことだ。

時々の思い出と出会い、今を生きたいと思う。阿弥陀如来様に朝晩、手を合わせて、いる間に感じたことを記した次第です。

## 退職のご挨拶



前富山教務所書記 岩松 知也

本山からの辞

令を受け、二〇

一二年八月三十  
一日付で宗務役

員を退職いたし  
ました。

富山教区の皆さまには、三年間を公  
私にわたり大変お世話になりましたこ  
と深く感謝申し上げますとともに、突  
然の退職により職務を全うすることが  
できず、多大なご迷惑をおかけしまし  
たことを深くお詫び申し上げます。

思い返せば、二〇〇九年五月一日に  
富山教務所書記補の任を拝命し、初め  
て富山の地に足を踏み入れたとき、不  
安と緊張の只中にいた私を迎えてくだ  
さったのは雄大な立山連峰と五一会に  
ご参集のご住職の皆さまでした。雄大  
な立山連峰には「なにも心配すること  
はない」と背中を押された思いがし、  
ご住職の皆さまからもたくさんの叱咤  
激励をいただき、このとき本当の意味  
で宗務役員としての一歩を踏み出すこ  
とができたような気がいたします。

特に、青少幼年教化小委員会の事務  
を担当させていただいたことをきっかけ  
に、若手寺族の皆さまと出会えたこ

とは何ものにもかえがたい宝となりま  
した。青少幼年教化事業を始め、「別  
院に泊まろう」や大法話大会、仏青や  
災害復興支援ネットワークなど若手の  
皆さまの発想力と行動力にはいつも刺  
激をいただきました。

私事で恐縮ですが、現在私は入寺し  
ました淨善寺（茨城県古河市）に戻り  
法務に専念した生活をしております。  
法務に専念と申しますと、こちらは

富山とは異なり月参りの習慣がありま  
せんので、皆さまのように毎日お参り  
がなくお寺にいることが多い生活をし  
ています。ただ、有り難いことに日頃  
よりお寺にお参りくださる門徒さんが  
おり、毎日のように門徒さんと様々な  
お話をさせていただいています。その  
中で日々感じることは、どこにいよう  
とも問題というものは降りかかり、常  
に問われているということです。至極  
当然のことではございますが、門徒さ  
んとお話ししているとひしひしと思  
知られます。当寺住職からは、「お  
寺とは常に仏法と娑婆のせめぎ合いを  
している場である」ということを常々  
教えていただいています。

ただ仏恩の深きことを念じて、

人倫の嘲を恥じず。

『教行信証』後序 聖典四〇〇頁  
富山教区の皆さまのお育てに預かり  
ましたことは、この上ない幸せなこと

でございました。今度はそのことを糧  
に、茨城の地で引き続き教団人として  
共に仏道を歩ませていただきたいと思  
います。

## 着任のご挨拶



富山教務所嘱託 石川 真也

この度、二〇

一二二年十月一日

付けで、富山教  
務所嘱託を拝命  
致しました石川

真也と申します。出身は滋賀県で富山  
教区が初任地となります。休日に車で  
地方にドライブに行ってご当地の名産  
を愉しむことが趣味であります。富山

は食べ物がおいしいと聞いているので  
非常に楽しみです。

富山の地を踏むのは初めてで関西出  
身の私としては風習や気候などの違い  
に戸惑うことがあるかもしれません。  
特に降雪に関しては未体験の量だと思  
いますので部屋に籠りつきりにならな  
いように気をつけたいと思います。  
稚拙な挨拶ですが、教区の皆様と共に  
に切磋琢磨していきたい所存であります  
ので、叱咤激励の程宜しくお願ひ致  
します。

教化日誌

(一)〇一二年七月一日(二)〇一二年十一月三十一日

8月		9月		10月		11月		12月	
1日	戦死・戦災死者追弔法要兼申経法要 （八・一法要）	21日	第三回教区改編地方協議会	6～8日	富山別院報恩講	19日	北陸連区ソフトボール大会	14日	組門徒会役員研修会
2日	正副組長会	23日	第十三組組会	16～17日	全国教区駐在教導研修会	21～23日	富山別院秋季彼岸会	19日	富山別院声明作法講習会
7～9日	児童研修大会	25日	第十一組組会	24日	共学研修会	25日	共学研修会	19日	富山別院秋季彼岸会
13～14日	北陸連区坊守研修会（小松教区）	29日	人生講座（第四回） 【講師 藤塙俊基 氏】	24日	全国教務所長会	26日	解放連・あいあう会定例学習会	14日	北陸連区坊守研修会
13日	人生講座（第五回） 【講師 山内小夜子 氏】	30日	人生講座（人形劇ほか） 第十一組組門徒会	25日	全国主計会	30日	別院D Eみんなあつまれ報恩講（児童 教化連盟）	11日	富山県喜多大谷派教誨師会総会
10日	第十組組門徒会	31日	第九組組會	24日	教区同朋の会報恩講	11日	教区仏教青年会準備会（須弥盛作り）	11日	富山県喜多大谷派教誨師会総会
11日	富山教区同朋会議	3日	第十二組組門徒会	25日	教区門徒戸数調査委員会	16日	解放連・あいあう会代表会	14日	教区坊守会声明作法講習会
7日	第十二組組門徒会	4日	第九組組門徒会	26日	教区門徒戸数調査委員会	27～28日	富山教区 真宗本廟御正當報恩講 団体参拝	27～28日	富山教区 真宗本廟御正當報恩講 「ご満さん」
7日	ハンセン病問題ふるさとネットワーク	5日	第十組組會	27～28日	富山別院 「ご満さん」	30日	共学研修会	30日	富山県喜多大谷派教誨師会総会
富山シンボジウム	富山教区同朋会議	7日	第十一組組門徒会	30日	教区同朋の会報恩講	14日	富山県喜多大谷派教誨師会総会	14日	富山県喜多大谷派教誨師会総会
人生講座（第五回）	人生講座（第五回）	11日	富山教区同朋会議	11日	教区同朋の会報恩講	14日	富山県喜多大谷派教誨師会総会	14日	富山県喜多大谷派教誨師会総会

※如大地編集委員に新たに委員が加わりました。

(華)

永崎 晓 第十組 永宗寺